
(変態 + ヤンデレ電波 + 極悪人面) × トリップ少女 = ?

栂月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

（変態＋ヤンデレ電波＋極悪人面）×トリップ少女Ⅱ？

【ZU-1】

N
7
5
8
9
T

【作者名】

枷月

【あらすじ】

わたしは異世界から来た。ある日いきなり、起きたら森の中だったというびつくり体験をした十九歳の女子だ。親切なお姉さんに拾われて、異世界で生きることを決めた……けど、わたしを拾ってくれたお姉さんは実は××××だったり、初対面の美青年に××を××られたり、なんだか大変です。でも今日は天気も良くて、いいことがありそうです。ありませんでした。

更新は限りなく気まぐれです。

まずはとある少女の物語

「ユキちゃん、出てくれるかしらあ？」

「はい」

今日はとても晴れていて、良いことがあるかもなあなんて思いながらノックされた玄関のドアを開けた。

一つ、言っておこうと思う。

わたしの勘はとんでもなく残念だと。

「どうして」

左右で違う色をした瞳をした青年が、わたしの首を絞めながら泣いている。

わたしを殺すつもりはないのか、意識が飛び掛ける度に、その手はゆるめられる。

押し倒されて馬乗りにされながら首を絞められるなんて初体験でどうしたらいいのかわからないままにいるのが気に食わないのか、青年はゆるめていた手に再び力を籠め始めた。

「ユキちゃん！」

あー、わたしを拾ってくれたお姉さんがびっくりしてる。
そりゃ、そうだよな。

善意で拾った娘がいきなり訪ねてきた美青年に押し倒されて首絞められてるんだもん。

——なんて悠長に考えている間に息が出来なくなつて、目の端から涙が溢れる。

同時に、ぼたりと顔の上に雫が降ってきた。

泣じゃない。どうやら唇を噛み締めすぎて、血が滴り落ちてきたみたいだった。

「……貴女はっ！ 何時になったら私を頼る？ 私が本当に見たいのは苦しむ貴女じゃない。違う世界に連れてくれば私のモノになると思っていたのに」

確かに、この世界の人間じゃない。

山田由紀、十九歳、コンプレックスは背が低くて童顔で、いまだに中学生に間違えられること。

ある日目が覚めたら森の中にいて……途方に暮れてたら、親切なお姉さんに拾われた。

そんな人間だ。

「あんた、何時までアタシのユキちゃんの首絞めてるのよおおお
！」

「がふっ」

不意に青年が、真横に吹き飛んだ。

ゲホゴホと咳き込みながら起き上がると、お姉さんが涙目でわたしを抱き締めた。

視界の端に転がる血の付着した鉄パイプ……鉄パイプ？

「お、お姉さん……？」

なんか、お姉さんの身体が妙にゴツゴツしてるんだけど。
きつと気のせい。そうに決まってる。

「もうっ！ ユキちゃんがアタシに助けてっで涙目で懇願してくれ
るのを待ってたのに！ 悶え苦しむユキちゃんも可愛いからあ」

「……え？」

「……苦しむユキちゃんを見てたらっいつい下半身がお姉さんから
お兄さんになっちゃったわ……」

「はっ？」

なんか、聞き逃しちゃいけない台詞を聞いた気がする。

逃げ出したくて手足をじたばたさせたのに、お姉さん……はニッ
コリ微笑みながら更にキツく抱き締めてくる。

「く……っ主>あるじくを離せっこの変態野郎」

青年が、フラフラとしながら立ち上がった。

お姉さん……に向かつて暴言を……変態野郎……野郎？

「野、郎？」

「いやあん。殴り足りなかったのかしらあ」

「主が私を頼らないのは貴様のような女装野郎のせいだったのか――
殺す殺す殺す殺す殺す」

「アンタに殺されるほどアタシは弱くないわよ。これでも帝国の――
……とにかく、ユキちゃんにアンタは必要ないの。いらないの。
邪魔なの。ユキちゃんはアタシとイチヤイチャラブラブしながらこ
こで暮らすんだから」

帝国の？

というか、あるじ？

わけのわからない言い争いが頭上で繰り広げられている。

わかることがあるとすれば、わたしに関する話であり、お姉さんの本性はお姉さんじゃなくてお兄さんだということだ。

あ、あれー……わたし、お姉さんと一緒にお風呂に入ったよ？

「ハッ、イチヤイチヤラブラブ？ 男としての貴様は認められてないだろう」

「じっくりゆっくりオトすつもりだったのに、アンタが邪魔したんじゃない。アタシと一緒にお風呂に入ってくれなくなったらどうしてくれるのよ」

ナイスバティーだったのに。

あの身体は何だったの！？もしかして、両性類？なのだろうか。じっくり裸体を観察したわけじゃないし。

「主、私と一緒に死のう。平気だ、今度は苦しくないようにする」
「嫌だよ！」

死にたくないし。

首を左右に振ると、残念そうな表情をされた。

「ユキちゃん、アタシと天国にいきましょう。アタシのテクニクは帝国一だからハジメテでも大丈夫よ」

何だか響きが卑猥。

ハアハアと息が荒いから、きつと気のせいじゃない。

「遠慮しますううわああん！」

お姉さんのフリをしたお兄さんを渾身の力で突き飛ばして、初対面でいきなり人の首を絞めてきた青年を押し退けて、わたしは自由な世界へと飛び出した。

残念ながら異世界の地理はわからない。

だから家を出ると知らない道を、走って走って走った。

「きゃっ！」

「うわっ！　なんだ、君は……」

何処かの路地を曲がると、男の人にぶつかりそうになった。ぶつかるよりも早くその人に抱き上げられる。両足が地面についていない。

「す、すみません……」

「謝るということは自分が悪いと自覚しているんだろう？　ならば償いをしてもらおうか」

顔を上げると、視線だけで何人が殺してそうな顔をした人がそこにはいた。

抵抗する気には到底なれない。

アイスブルーの瞳が、冷たくわたしを見据える。

いきなり飛び出したわたしが悪いから何も言えない。

「つ、償い……？」

「く………なんという破壊力………う、上目遣いはやめろ！」

「え、す、すみません？」

顔を、首まで真っ赤にしてわたしから視線を逸らす極悪人面の…

…アイスブルーの瞳をした男の人。

「……もついい。家は何処だ？ 少女が歩くにはこの路地は危ない。後日死体で見つかりでもしたら俺の気分が悪くなる。さっさと家の場所を言え」

「ぷつ……あ、ごめんなさい！」

だって、極悪人面で『家』の場所を“言え”なんてダジャレみたいなこと言うからおかしくて仕方がない。

「何がおかしい」

「別に、何でもないです！」

「はぁ、それで家は何処なんだ？」

「家は……、ない、です」

男の人の眉間にシワが寄る。

ゆっくりと地面に降ろされた……後も何故か手を掴まれたまま。

頭二つ分も背が低いから、下手したら親子もしくは誘拐されてるみたいに見られそうだなあ、なんてのんきに考えていたらグイッと顎を上に向けられた。

い、痛い。グキッて音がした。

「おい、首にある指の痕はどうした。……虐待か……それで家はないなどと……ちっ」

何やらぶつぶつと小さな声で呟いたかと思うと、殺人ビームを出しそうな目でわたしを見つめた。

「家がないのなら仕方がない。俺の家に連れていくが、文句はないな？」

そして、いきなりわたしを荷物のように担いだ。
お腹が圧迫される。

「うえっ」

「静かにしている。まるで俺が誘拐犯のように見えるだろう!？」

異世界では、見知らぬ人間を家に招き入れることは日常茶飯事なのか。

わたしがここで抵抗したところで、油断も余所見も言い争いもしていない彼を押し退けて逃げることはきっと出来ない。

つまり何が言いたいかというと。

「……殺すときは、一瞬で痛くないように……それだけはお願います」

人間、諦めが大事。

わたしを担いでいた彼が、妙な勘違いと変な庇護欲を抱いたことにわたしは気付かなかった。

ついでに言えば、お姉さんのフリをしたお兄さんと初対面で人の首を絞めてきた美青年が全力でわたしを搜しているなんて、知るはずもなかった。

とある悪魔が現在に至るまでの物語（前書き）

初対面でヒロインの首を絞めた！？な悪魔の話です。過去
この話には悪魔による悪魔のための妄想が含まれています。

とある悪魔が現在に至るまでの物語

きつと、必然だった。

暇で暇で、人間の夢に入り込んで悪夢を見せていた中の一人……
始まりは、ただそれだけ。

それなのに——今は。

苦しい。苦しい。

住んでいる世界が違う私は、彼女の現実での行動に干渉することが出来ない。

だから夢の中で会うことしか出来なかった。

けれど、その夢の中での逢瀬を、彼女は目覚めると忘れてしまう。
悲しい。悲しい。

ただでさえ人間の寿命は短いというのに、夢を見ない日が続けば
私は彼女に会うことすら叶わない。

「本当にいいのか、ジルベルト」アドル。一度受け取ったら返さないよ」

彼女が付けてくれた名前を死神に呼ばれるのは嫌だったが、仕方がない。

嗚呼、出来るならば同じ名前を持ったものを殺して回りたいと思う。

「構わない。こんなもので彼女をこちらに喚べるなら」

死を司る神は唯一、どの世界にも干渉することが許された存在だった。

何度も何度も通って、やっと交渉までこぎつけた。

彼女をこちらの世界に喚ぶ代償は、私の片眼。

ブチブチと音を立てて引きちぎられた眼球。

人間ではない私は、痛みなんて感じない。

失われた部位は再生しなかったが傷は何もなかったかのように塞がった。

「嗚呼、天然の金の瞳なんて滅多にないんだぜ……っ?」

「煩い眼球コレクター。さっさと彼女を喚べ」

死神はうつとりと私から引きちぎった眼球を眺めている。

「あーはいはい。その前に……ほれ、義眼くらいはあげるよ。片眼が空洞じゃあ女の子は怖がっちゃうからさ」

「ユキはそんなことで私を拒絶しない」

放り投げてきた球体を受け取りつつもきっぱりと言えば、死神は不思議そうな表情を浮かべた。

「てゆうか、君みたいな悪魔が人間に仕えるなんてねえ。悪魔って人間の恐怖とか欲望を糧にしてるんじゃないかなかった?」

「ユキは、悪夢を見せていた私に泣きながらすがってきた……もう一度、もう一度と繰り返していたら彼女はなんと私に名前を付けることで私を支配した。その時に気が付いた、私は彼女を愛している」と

ふと顔を上げると、何故か死神はポカーンと口を開けたまま硬直していた。

私の、彼女に対する愛に耐性がないからだろう。

「死神？」

「……なんていうか、かわいそー」

「可哀想？ ああ、違う世界に生まれてしまったのは仕方がない。きっと私と彼女の愛を深める試練なんだろう」

「いや、違うし。お前じゃないよ彼女がだよ」

「ああ、夢でしか私と会えない彼女は可哀想だろう？ だからこそ貴様に頼んでいるんだ」

苦虫を噛み潰したような顔をされた。

ここに虫がいるわけもない。変な奴だ。

「……うーわあ」

「それで、いつになる。早くしろ、今すぐ、さっさと、迅速に」

「いきなり移したら周りの人間の人生に悪影響だから慎重にやらなきゃいけないわけ。わかる？」

「他の人間がどうなるうと知ったことが」

攻撃してしまいたい気持ちをギリ、と自分の腕に爪を立てることで抑え込む。

今のところ、彼女をこちらへ移すにはこれしか方法がないのだから、一時の破壊衝動に任せて行動するわけにはいかない。

「そんな殺気立たなくても対価は受け取ってるから、ちゃんとやってやるって」

「当たり前だ」

「……それじゃ、一人にしてくれるかい？」

……ここにおいても何も出来ないだろう。

下手に急かして失敗されても困る。

だから私は夢を見ながら待っていていよう。彼女の夢を、見ながら。

「私の主>あるじく、ユキ」

屈辱であるはずの支配さえ今は心地好い。

私と彼女の、唯一の繋がりだから。

「彼女も早く私と会いたいはずだ……」

私は呟く。

まさか、私が寝過ごしている間に死神が彼女をこちらに送り込み
終えていたせいで、運命的で素晴らしい初めての生身のユキとの出
会いが台無しになるところか新たな邪魔が入るなどとは思ってもせず
に。

とある治療士がお姉さんになったりお兄さんになったりするに至るまでの物語

ヒロインを拾ったお姉さん……かと思いきやお兄さんだった！？
な人間のお話です。 過去

とある治癒術士がお姉さんになったりお兄さんになったりするに至るまでの物語

「今度はそう簡単には戻れませんからね！」

アタシの趣味は、アタシ自身を着飾ること。

それには女の子の服のほう都合が良かっただけで、アタシは別に、女の子になりたいかったわけじゃない。

確かにアタシは美しいから女の子の服のほうが似合う。それに、男にだってモテモテだし、その上数少ない戦える治癒術士だ。

だけど女の子とイチヤイチャしたり、一緒にお風呂に入ったり、あーんなことやこーんなことをしたいとは思ってる普通の健全な男だ。

この胸部にある膨らみ……と、生まれたときから一緒だった下半身のものが行方不明なのは――またか、ドヤ顔をしている同僚に向かって、護身用に使っていたナイフを投げた。

当たらなかつたけど、パリリと髪の毛が落ちたからかすりしただんだろう。

「ひゃわっ！？ あ、危ないじゃないですかあ！」

エイダ「フランチーズ。アタシの学生時代の後輩で、人の外見を変える呪いに特化した呪術士兼治癒術士。

治癒術士の素養を持っていることが発覚しなければ、呪術士として活躍していただろう。

もっとも、そうだとっても、彼女が掛けられる呪いは嫌がらせとしか言えないような種類じゃないけど。

「エイダ、早く元に戻しなさい」

「やーですよあ、フェレス先輩が女になればわたしが騎士様に嫁ぐ必要ないじゃないですかあ。あの人と先輩、仲良いですし」

「それって例の、治療術士と騎士をくつつければ戦える治療術士になれる才能を持った子どもが生まれるかもしれないとかいう計画のこと？」

解呪士、呪術士、治療術士、すべてをひつくるめて『魔法使い』

だとか『魔女』と呼ばれる中でも、治療術士は数が少なく虚弱体質も多い上にそのほとんどは女の子。

男であり、虚弱体質どころか騎士にだってなれるアタシや、至って健康で呪術も操れるエイダみたいな例外もいるけど。

「わたしが呪術士兼治療術士だからって、酷いですよあ。それに、子どもを産むために結婚なんて古くないですかあ？」

「結婚が嫌なら嫌って言えばいいじゃない。わざわざ人の性別を勝手に変えるよりはマトモよ」

「フェレス先輩みたく上司に逆らうなんて出来ない可哀想な後輩を助けると思っ、あの騎士様と結婚してくださあい」

「大体ね、ただ結婚しただけじゃ子どもは生まれないの。わかる？鳥が運んでくるわけでもなければ薔薇の中からいきなり現れるわけでもな・い・のっ！」

「知ってますよあ。性教育くらい受けてますからあ」

間延びした口調にイラツとしながら、エイダの頭をわしつと掴んで指先に力を籠める。

「ふざけるんじゃないわよ。アタシは男に興味ないの、結婚するなら可愛い女の子しか認めないんだから。やられるなんて認めない」

「い、いたつ痛いすう！」

「イチヤイチヤとあーんなことやこーんなことはアタシがするの、しながら暮らすのが夢なんだからっ！」

涙目でアタシを見上げるエイダ……に更にイラッとした。

「あつ、いたつ、フェレシスせんばあい、女の武器にコロツとやられてくださいよお」

「女の武器？ ハッ」

「……鼻で笑うとか、極悪非道なんですけどお」

こんなやりとりは初めてじゃない。

今までも何度かこんなことがあつては『綺麗なほうのフェレシス』だとか『帝国の変人の双子』だとか不名誉な呼び名をされながら、同一人物だとは思われていないから驚きだ。

ていうかアタシは『帝国の戦える治癒術士』で有名なハズなのに綺麗なほうの、とか何なのよ。

アタシはいつでも綺麗だっていうのに。

「極悪非道顔したやつと結婚したくないからって先輩の性別を変えるよりは極悪非道じゃないわよ」

「先輩ーっ、じゃあせめてあつちから断るようになってくださいよお」

「じゃあ、早く、アタシを、元に戻しなさい」

いや、待って。

もしかしてこのままなら女風呂に入れる……？

幼女から淑女まで、見放題？

「ちょ、フェレシス先輩、鼻血……」

「あらやだ」

「何を想像してるんですかぁ、やらしー」

「やっぱりいいわ。楽しめそうなもの。で、いつ頃元に戻るのかしら」

「さぁ」

アタシは悪くないわよね？

エイダの頭がミシツていったけど、悪くないわよね？

「いつも、言ってるわよね」

「へ？」

「『へ？』じゃないわよ。呪いを掛けるときはあらかじめ、いつ頃もしくは何をしたら解けるのか把握しておきなさいって」

「えーっと、えへへ……」

「笑って誤魔化しても許さないわよ」

まさか死ぬまで女の子の身体で生きていくなんてことになったら、いくら女風呂入り放題でも無理。

でも、女同士という手もありかしら……いや、なし、ないわ。

「ええー……」

「それにこのままじゃ仕事が出来ないでしょ！」

治癒術を使うのには、細かな制御が必要とされる。

呪いを掛けられて干渉されているままじゃ、ろくに治癒術を使えやしない。

複雑骨折を治せるくらいから擦り傷を治すので精一杯なくらいまで使えなくなったら、給料が！減るじゃない！

「アンタ、今すぐ長期休暇の申請してきなさい」

「誰のですかぁ？」

「アタシのに決まってるでしょ！ アンタが休暇とってどうするのよ、アンタは馬車馬のように働きなさいアタシの代わりに」

「ええー……」

不満そうなエイダの背中を、本当なら蹴り飛ばしたい気分だったけど、自重して見送った。

そうして向かうは『騎士様』というよりも『死神』のほうが似合いそうな友人の元。

「ねえちよっと、ヴィシユア＝バイルシュミットを呼んでくれないかしら」

「はっ？ ヴィシユア隊長に客……しかも超美女……ウワアアッこれは夢？ 幻覚っ？ オレ働きすぎ!？」

「フェレシスが呼んでるって伝えてくれればわかるはずよ、よろしくね？」

適当に微笑んで見せれば顔を赤くして小動物のように走り去っていった。チヨロいわね。

「エイダに合いそうなタイプね……」

そんなことを考えながら待つ。

……あんまり気が長くないアタシにしては待ったわ。だってもうあの子の姿が見えないじゃない？

よくよく考えてみればここに来るのも初めてじゃないわけだし、ヴィシユアは極悪人面のくせに生真面目だからフラフラさまよい歩

いてたりしないだろうし。

「さっきの子には失礼かもしれないけどアタシが自分で捜したほうが早いわよねえ」

アタシは呟いた。

まさか、この時掛けられた呪いが原因で思わぬ拾いものをするなんて思いもせずに。

とある治療術士がお姉さんになったりお兄さんになったりするに至るまでの物語

どうしよう、一覧に表示するように戻そうか……でもまた書けなくなったら困るし……。

とある極悪人面が苦勞人に至るまでの物語

両親は、城下で少女向けの小物やら装飾品を作る店を開いていた。その影響で、俺は、人形やら可愛いものに囲まれることも多かった。

だからだろうか、似合わないとかわかっていながらも、俺は子ども（健全な意味で）やら小動物などの小さくて可愛いものが好きだった。

ただ、吊り上がった目にあまり動かない表情——幼少の頃から父親譲りの悪人面だった俺は、成長とともに極悪人面になり、子どもとは視線を合わせれば泣かれ、親には誘拐かと大騒ぎされ、挙げ句の果て小動物は俺の前に姿すら現さないのだが。

「ヴィシユアたいちよー」

「……何だ」

自分の人相の悪さで味わった苦い日々を思い出していると、背後から情けない声が聞こえてきた。

父の勧めで騎士団の入団試験を受けたのが始まりで、つい最近、上層部から実力を認められ騎士団の中でも攻撃力を重視した隊である火竜隊の隊長になったのはいいが、他隊の隊長や貴族からは『極悪人面の平民』だと陰口を叩かれ、平民出の仲間内でも『視線で人を殺せる』などと言われているらしい。

そんな俺に臆することなく話し掛けてくる人間など限られていた。

「ラドリアか」

「は、はいっ？」

「いや、何でもない。何だ」

ラドリア「メイツシュ。」

一言で言えば、へらへらした男。

もっと詳しく述べると、貴族の三男で、一族でも珍しく魔法の素養がなかったため騎士団に所属しているへらへらとした男、だ。

……魔法使いの家系でありながら騎士になるための努力を欠かさないことや対人技能は認めるが。

苛立ちを籠めて睨み付けられ、面白いくらいに肩を跳ねさせた。

「ひつ、たつ、たいちよーに睨まれると寿命が縮む気がするんですけどー！」

「気のせいだ」

「いや、絶対……あ、ああー何でもないです！　じゃなくて、超美女がたいちよーのこと呼んでるんですけど」

微かに頬を赤く染めるラドリア。

美女なんて、見慣れているだろうに……珍しい。

「名前は聞いたか」

期待なんてものは微塵もない。

俺に用事がある人間なんて大抵が苦情か文句か厄介な頼みごとだ。美女——何故だか、嫌な予感がする。

「フェレシス、だったような……」

「フェレ、シス？」

その名前を聞いて脳内に思い浮かぶのは、貴族で、女装趣味の、
真正正銘……男。

「も、もしかしてヴィシユアたいちよーの彼女!？」
「違う」

あいつの女装癖は有名で、新人というわけでもないラドリアが知らないわけもないだろう。
からかっているのだろうかと横目で見るが、ラドリアの表情に異変は見られない。

「じゃあ家族、なわけないですよね……はい」
「……とにかく、行ってみるが……何処に行けば良いんだ？」

知り合いであろうとなかろうと、俺に用事がある人間を待たせて置くわけにはいかない。
そう考えてラドリアの返答を待つ……が、ラドリアは何も喋らない。

「あ、の、えーっと」

視線で促すとやっと喋り出した……が、心なしか声が震えている。

「何だ、どうかしたのか」
「実は、気が動転してて覚えてな「ちょっとヴィシユア! 遅いから勝手に来たわよ」

ラドリアの発言を遮るように声がした。
嗚呼、ややこしいことになりそうだ。
こちらに向かってくる女——女、だろう。

だが顔は、どこかで見たことがあった。少し高くなっているようだが、声も、知っている。

フェレシス「ゴートン。

女装癖のある治癒術士。

そして、不本意ながら俺の数少ない友だ。

「こ、この人ですたいちよー！」

「もうっ、人を指差しちゃダメよ」

やんわりと手を握られ、につこりと微笑まれ、ラドリアは照れ臭そうにうつむいた。

おい、騙されるな。

原因はわからないが、いや、知りたくもないが、そいつは、フェレシスは、男だ。

「フェレシス、話があるんだろう。行くぞ」

「きやあっ」

鳥肌が立った。

『きやあ』？まるで女のような声を……俺の勘違いで、これは、別の『フェレシス』なんだろうか。

「お前は、フェレシス」ゴートン。間違っているか？」

「は？ 何よいきなり。アンタ、親友の顔も忘れちゃったの？」

親友、という部分は大いに否定したいところだが、そう言っている場合でもないだろう。

「今度は何をしたんだ」

「アタシのせいじゃないわよ。エイダ……同僚がアンタとの結婚を

嫌がってアタシに押し付けてきたの。それで呪いを掛けられて女の子にされちゃったのよ」

「結婚、だと？」

フェレシスの口から飛び出した聞いたことのない話に、眉間にシワが寄る。

また上層部の思い付きだろうか、それとも、俺を陥れるための何かか。

無言で考えていると、フェレシスが甲高い声を上げた。

「キーツ！ こっちには話が来てないわけ！？ 何よそれ……わざわざアタシがあの子の代わりに結婚のお断りをしに来たっていうのに」

「そうか、それは済まなかった。ではそれで用件は済んだな。帰ってくれ」

注目されるのは好きではない。

この顔のせいでただでさえ噂の的である俺が、見た目だけを見れば美女であるフェレシスを前に腕を掴みながら話し込んでいる姿を見られでもしたらどうなることか！

面白おかしく斜め上を向いた噂を流されるに決まっている。

「いやあん、つ・め・た・い」

「……っ」

これは――そうだ、得体の知れない形をした魔物を目の前にしたときのような、ぞわぞわとした感覚だ。

「ちょっとお、そのドン引きな顔はやめなさいよ。悲しくなるでしょ」

「まだ何かあるのか」

嫌な予感しかしないのだが、あながち間違いでもないだろう。
その証拠に、ほんの一瞬だがフェレシスの表情に罪悪感が浮かんだのがわかった。

「実は、ね」

「ああ」

「仕事、しばらく出来なくなっちゃったから家を貸して欲しいのよ。
城下の片隅にあつたわよね？」

「……は？」

「休暇中は確か実家じゃなくてそっちに帰ってたでしょ。そこを貸して欲しいんだけど」

確かに、治癒術というのは繊細なものだと聞いたことがある。
フェレシスが繊細だとは認めがたいが、それは置いておく……違
う、言いたいのはそんなことじゃなかった。

「宿に泊まれ」

「だって、ヴィシユアの家ならタダじゃない」

「金に困ってなどいないだろう」

「本音を言つと、あそこなら人があんまり来ないでしょ。アンタの
家だって知れ渡ってるから泥棒も来ないし、最高じゃない」

まるで俺の家だから誰も来ないと言っているような言葉に、悔し
いが俺は言い返せなかった。

確かに誰も来ない。呼ぼうとも思わないが。

「……家の中のものを壊したりしないと約束するなら貸さないこと
もない」

「…………要するに?」

「鍵は、少し待っている。取ってくる。いいか、そこから動くなよ」

これ以上騒げば、またいらない噂を立てられるだけだ。

それが恐ろしい……他人からすれば俺の顔のほうが恐ろしいのだから。

「全く……」

俺は呟いた。

まさか——俺がこの時フェレスに家を貸したことで、運命とも思える出会いをするとは思ってもせずに。

とある極悪人面が苦勞人に至るまでの物語（後書き）

次は現在（つまりは最初の続き）に戻ります（多分）。

それからとある少女と極悪人面の物語（前書き）

『まずはとある少女の物語』の続きになります。

それからとある少女と極悪人面の物語

「喋ると舌を噛む。黙っている」

わー、景色が過ぎるのが早いなー。……なんて現実逃避をしている。

無理。無理無理無理。

きつく目を瞑って、服にしがみつく。
ジェットコースターとか苦手なのに。

見えているのはわからないけれど頷いておいた。

風なんて吹いていなかったというのに顔に風を感じるから、多分、それなりの速度だ。

しかも、人一人を抱えているのに。

「着いたぞ。……大丈夫か？」

「だい、じょぶ、です」

お腹がグエツとなったままジェットコースター並みの動きを体験したせいか、足がフラつく。

「中まで抱えて行ったほうがいいのか？」

極悪人面に反してわたしを支えてくれた手は優しい。

「平気……です」

人は見かけによらないって本当だったんだなあ。

じ、と見つめてみると戸惑ったような表情をされた。

……良い人、なの、かもしれない。

いや、でも、良い人だと思ってたらお姉さんのフリをしたお兄さんだったりしたし、油断は出来ない。

「そうか。……無理をする必要はない。ああ、そうだ。お前の名前を覚えてくれないか？ 手続きをしなければならぬ」

「て、つづき、ですか？」

家に入るのに？と首を傾げる。

もしかして売られるのだろうか。

そんな不安が浮かび掛けた瞬間、極悪人面さん——名前を知らないのでそう呼ぶ——がわたしの後方を指差した。

「家、と言っても騎士団の宿舎だ。安全面では城下とは比べるまでもない。それに設備もそれなりだろう」

「騎士団……」

「そういえばまだ名乗っていなかったか、俺はヴィシユア・バイルシュミット。帝国騎士団火竜隊隊長をしている」

隊長、ということはやっぱり偉い人なんだろうか。

宿舎と思われる建物はそれほどの規模ではないけれど、民家に比べれば（当たり前だけど）大きい。

というか隊長さんに対して売られるかも、なんて失礼なことを考えてしまった……心が読める人じゃなくて良かった。

「バイルシュミットさん、ですか？ わたしはユキ・ヤマダです」

「ヴィシユアで構わない。ユキ……、これから宿舎に向かうが、途中何を言われても気にしなくていい。わかったな？」

「は、はい……？」

「はぐれると面倒だ」

差し出された手を躊躇いなく掴む。

差し出したのはヴィシユアさんだというのに、般若みたいな顔をされた。何故。

……それにしても、何を言われるんだろう。

「あれ、顔が真っ赤」

ボソツと呟いただけだからヴィシユアさんには聞こえなかったんだろう。

もしかして般若みたいな顔で照れたのだろうか。
紛らわしいというか、不便だろうなあ。

「何だ。まだ歩けないようなら担ぐが？」

「何でもないです！」

今にも担がれそうになって、慌てて否定する。

担がれるのが嫌だからといってお姫さま抱っこをしてもらいたいというわけじゃないけど、担がれるのは肉体的にもよくないような気がする。具合が悪くなりそう。

そんなことを考えながら手を繋いでいる様子は、きっと端から見ると間違いなく誘拐犯と少女だと思うとヴィシユアさんが不憫で仕方なかった。

人がいないことに安堵しながら、ヴィシユアさんが「はぐれると面倒だ」と言いながらもわたしに歩調を合わせてくれることに首を

絞められたり性別が行方不明だったりした現実には疲れた心が癒されていくことを感じていた時だった。

「ぎゃーっ！ た、たっ、た、たいちよーがついに誘拐犯に！？」

ピクリ、繋がれた指先からヴィシユアさんの緊張が伝わってきた。

「……ラドリア」

ヴィシユアさんが地を這うような低い声を出すと、声を掛けてきた男の人が小さく悲鳴を上げた。

顔は笑顔なのに、口の端がひくひくときこちない上に貼り付いたように固まっている。

『ラドリア』は彼の名前だろうか。

「す、スミマセン！ たいちよーともあろう方が誘拐するわけないですね！ でもまさかたいちよーがロリコンとは……あ」

「ラドリア。覚悟はいいか」

ニヤリ、笑顔というには少々凶悪なそれをヴィシユアさんから向けられたラドリアさんは紙のように白くなった。

わたしはただ、辺りを漂い始めた不穏な空気を感じないようにするのに精一杯だった。

それからとある少女と極悪人面の物語（後書き）

8月16日には間に合いませんでした……。

とある騎士団下っ端の華麗なる日常の物語（笑）（前書き）

脇役のラドリア＝メイッシュの日常&視点の番外編です。

とある騎士団下っ端の華麗なる日常の物語（笑）

オレの名前はラドリア・メイツシュ。

魔法使いの一族の中で魔法使いの素質がなかったオレは、周りから馬鹿にされている。

貴族はもちろん平民出の奴等からも虐めっていうには幼稚な嫌がらせを受けたことも少なくなかった。

主に他隊で、しかも下っ端同然の奴等ばかりだけだ。

まあ、オレも一応は貴族だし痕が残るような暴行は受けたことがない。

へらへらへら。笑っていればこの罵倒も終わる。

あー、そしたら訓練に行かないと。もうすぐ火竜隊の訓練の時間だ。

それにしても、諜報を主に行っている雷竜隊の罵倒はねちっこい。皇帝陛下を守っている水竜隊は我関せずだけど皆性格が悪そうだし。

「聞いているんですかっ!？」

キーキーと喚いているのは、兄その一とその二を敵視している…
…どっかの誰か。

「えっーと、何の話でしたっけ？」

本当は聞こえていた。

彼いわく、オレはメイツシュ家の落ちこぼれたとか、兄たちが可

哀想だとか。

そんなこと言われなくてもわかってる。

「つていうかそろそろ訓練の時間なんでもういいですか？」

「訓練……？　っ、さっさと行けばいいでしょう！」

いやー、引き留めたのはアンタだろーっての。

平民平民と貶して行くせにヴィシユアたいちよーを怖がってて、陰口しか言わない小心者のくせに。

「あ、ヴィシユアたいちよー」

「ヒ！　ヒイイ！」

いい加減にしてもらわないと困るので、最も効果的な嘘を吐くと、奴は涙目で走っていった。その後ろ姿を嘲笑う。

……まあ、端から見たらまたへらへらしてるだけに見えるんだろ
うけど。

そんなことをしていたら、背後から視線を感じた。

「うちの隊の者が迷惑を掛けたようだな」

振り返るとそこには雷竜隊の隊長が立っていた。

相変わらずの威圧感はずがというか、直情型で、戦闘では力で押し切るタイプの火竜隊の奴等とは違って裏がありそうで嫌だ。

「雷竜隊のレゴル隊長様じゃないですか。ども」

「すまないな」

全く悪いと思っていなさうだ、というべきか……ヴィシユアたいちよーとは別の意味で怖い。

「いや、別に……」

「あれには厳しく言い聞かせておく」

思わず「御愁傷様」と言いたくなつたオレ、多分間違つていない。

「はあ」

「本当に悪いな。雷竜隊は貴族が多いからプライドが高過ぎて私にも扱いにくい。あー、さあ行くといい。火竜隊の隊長が鬼のような形相で訓練場に向かって歩いてたぞ」

本音が聞こえた気がする。

「あーっと、じゃあ失礼します」

仮にも騎士団の一部隊長を任されるくらいだし悪い人じゃないんだろう……腹は黒そうだけど。

そんなことを考えつつ訓練場に向かう。

「ねえちよっと、ヴィシユア・バイルシュミットを呼んでくれないかしら」

——不意に、呼び止められた。

危ない香りのする美女。こう、なんつーか、鞭とか似合いそう！

「はっ？ ヴィシユア隊長に客……しかも超美女……ウワアアッこれは夢？ 幻覚っ？ オレ働きすぎ！？」

「フェレシスが呼んでるって伝えてくれればわかるはずよ、よろしくね？」

よろしく、と言いつつもその言葉に拒否権はなかった。

なんか胸がドキドキする……？

あの笑顔で罵られたら……って。

「……………ちよつと待てオレ！！！」

いやいやいや違う。

断じて女王様っぽくてドSっぽいところにトキメキを感じたわけじゃない。はず。

オレはマゾじゃない。オレはマゾじゃない。オレはマゾじゃない。オレはマゾじゃない。マゾじゃない……マゾ、なのか？

もしかして罵倒されてへらへらしてられるのはオレがマゾだから！？

「ウワアアアヴィシユアたいちよー！」

この後オレは自主的に地獄の訓練をこなした。

その時のオレを見た奴等からの嫌がらせは減ったが何故か、「あいつマゾなんじゃね？」疑惑が浮上した。

とある騎士団下っ端の華麗なる日常の物語（笑）（後書き）

話が進められず番外編に手を出了しました……。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7589t/>

（変態＋ヤンデレ電波＋極悪人面）×トリップ少女＝？

2011年8月23日12時01分発行